

# 子どもの本

## 研究会

【私の一里】『君たちはどう生きるか』

吉野源二郎 筑

中嶋 ひろ子



この本のことは恥ずかしながら全く知らず、ある日久しぶりに本屋に行くと、漫画版、新装版が爆発的な売れ行きで、本屋の正面にずらりと並んでいた。特に漫画版は200万超の大ベストセラーになっていたが、とりあえず新装版を購入し読んでみた。一気に読んでしまったこの本は、私が子どもの時に出会っていた大切なものになっていたと思うし、共感できる」と、救われたこともあつたと思う。もしかしたら子育てにも影響したかもしれない。

主人公は中学2年生のコペル君こと本田潤一君で、日常生活で直面するさまざまな問題を通して、コペル君が叔父さんと生き方を考え成長していく物語である。子どもに向けた哲学書であり道徳の書で、人間としてどう生きればいいのかを考えさせるのだが、コペル君と3人の親しい友達の身近な誰もが共感できるテーマを通して展開されるので、難しい要素はなく自然に考えさせられるしかけになっている。この本に出てくるいじめや貧困、格差などは今も解決できていない問題であり、この本が戦前の1937年に出版されたことに驚き、昔も今も変わらない問題だと認識する一方、人生に真摯に向き合う姿勢を私は子どもたちにきちんと教えられただろうかと今更ながら反省する。大切なのは、自分の頭できちんと考えること。子ども自身にしっかり考えさせる前に、子どもが失敗しないよう、苦しい思いをしないよう先回りして親目線で考えた通りに答えを出すよう誘導していかつただろうかと反省する。そういう意味では、情報過多で本質を見失い、子どもをどう育てていいか確信が持ちづらい今の時代、親が読んでもいい本かもしれない。だから、私が子どもの頃読んでいれば、当然娘たちにも読むことを勧めただろうこの本を母となつた長女と次女にも勧めてみようと思つていて。

人は自分に与えられていないもの、足りていらないものばかり注目して、文句や不平を言いがちだが、自分の置かれている状況や幸せに気づいて感謝する気持ちを持ち、何歳であつたにしても、社会の中で「どう生きるか」を考えてみると必要なのかもしれない。

（熊本子どもの本の研究会 会員）